

学生による授業評価における満足度決定要因

— 授業改善を効率的に図る FD 組織化に向けて —

杉田由仁 吉田文子 松下由美子
(山梨県立大学看護学部)

1. はじめに

平成3年に大学審議会から出された『大学教育の改善について(答申)』は、大学の多様化・個性化を進め、その質を担保するための自律的な改善努力を求めた答申であり、それにしたがって大学設置基準が大綱化され、今日の各大学における自己点検、自己評価の義務化に向けての提言が行われた。この提言により、日本の大学に「点検・評価」というシステムが導入され、その具体的取り組みの1つとして「授業評価」が広がりを見せ始める契機となった。本学においても、平成17年度後期より学生による「授業評価アンケート」が導入され、来るべき大学認証評価および独立法人化を視野に入れながら、教育水準を高めるための取り組みが継続的に行われてきている。本報告は、平成19年度前期に209科目を対象として全学的に実施された学生による授業評価のデータを、看護学部FD委員会が独自に分析を行い、学部教員を対象とするFD企画1において発表を行った内容(平成20年7月23日)を再構成したものである。

2. 目的

- 1) 授業評価を今後の授業改善に有効活用していくための具体的方策として、授業に対する学生の満足度を決定する要因を明らかにする。
- 2) 満足度決定要因を考慮した授業改善を行う上で、どのようにFDの組織化を図ることが望ましいかについて考察を試みる。

3. 方法

授業評価は、原則として各科目の前期最終授業において、授業内に科目担当者が調査票を配布し、無記名で学生が回答し、調査票の回収は学生が行うという形式で実施された。評価項目は、表1に示す18項目であり、それぞれ「5:そう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない」という5段階のリッカート尺度により回答が行われた。データとなる209科目の内、欠測値のない208科目の有効データを分析対象とし、主成分分析および重回帰分析を適用した。

表1 授業評価項目とその平均・標準偏差 (N=208)

番号	評価項目	平均	標準偏差
Q 1	シラバスで事前授業がイメージできた	3.88	2.00
Q 2	シラバスに沿って授業が行われた	3.83	0.39
Q 3	成績評価基準が明確に示された	3.71	0.46
Q 4	難しすぎることも易しすぎることもなかった	3.66	0.57
Q 5	自分の身につくものが多い授業だった	4.08	0.51
Q 6	新たな興味・関心を呼び起こす授業だった	4.01	0.55

Q 7	授業の開始・終了の時刻が守られていた	3.95	0.49
Q 8	毎回の授業の要点がわかりやすかった	3.80	0.61
Q 9	難しい内容についてわかりやすい説明があった	3.90	0.52
Q 10	学習内容の提示の仕方に工夫がみられた	3.75	0.60
Q 11	学生の参加をうまく促していた	3.78	0.64
Q 12	学生の反応や理解の程度を確認していた	3.83	0.58
Q 13	提出物や質問に適切に対応していた	3.97	0.47
Q 14	聞き取りやすい話し方だった	3.97	0.62
Q 15	担当教員の熱意が感じられた	4.17	0.45
Q 16	授業以外に関連した学習をした	3.37	0.58
Q 17	全体的にこの授業には意欲的に取り組んだ	3.84	0.54
Q 18	この授業科目に総合的に満足している	3.99	0.55

4. 結果と考察

第1に、主成分分析の結果から、上記の評価項目はいずれも全般的な授業満足度につながる指標であることが確認された。第2に、授業全体の満足度を従属変数、それ以外の項目を独立変数としたときの重回帰分析の結果からは、授業の満足度とは授業内容、授業方法および成績評価に関連する要因によって決定されることがわかった。第3に、学生が授業内容や方法に対して満足感が得られるような授業を行うことにより、授業に対する意欲化が図られ、その結果として総合的満足度につながるという関係性について示唆が得られた。

表2 FD組織化類型と研修例

改善対象：教育方法的要因	改善対象：教育内容的要因
I型：全学・伝達講習	III型：専門領域・相互研修
FD研修(例) 教育実践の専門家による指導技術に関する、全学・学部全体を対象とした講演や講義、ワークショップ	FD研修(例) 専門分野を共有する教員同士による講義内容案についての研究協議
II型：全学・相互研修	IV型：専門領域・伝達講習
FD研修(例) 公開研究授業の参観および事後の授業研究会における指導技術改善に関する協議	FD研修(例) 当該専門分野の専門家・有識者等を招いての講演や講義

さらに、決定要因を考慮した授業改善を行う上で、どのようにFDの組織化を図ることが望ましいか、について考察を試みた結果、教育方法的要因については「I型 全学(学部)・伝達講習」「II型 全学(学部)・相互研修」、また教育内容的要因については「III型 専門領域・相互研修」「IV型 専門領域・伝達講習」というFD組織化類型(表2)によって改善への取り組みを行うことが望ましいという結論に至った。